スペイン語創出文法理論の体系化

原 誠

0. 初めに

筆者はこれまでに、相互に関連性のあまりない36点の創出文法関係の論文を発表してきた。しかし最近はいつ筆者の寿命が尽きてても不思議ではない年齢に達したことから来る一種の焦燥感のためであろう、同理論の体系化を図りたいという気持ちが強くなってきた。その気持ちを具体化したのが本稿である。このようにして自己の理論に基づいて自己のスペイン語文法を樹立せんとする筆者の真意は、基底に理論を欠いた個別言語の文法はもちろん不可であるが、実際の文法に裏付けられない理論も不可であるという点にある。その意味で筆者は今こそ創出文法理論に基づいて、スペイン語全体を視野に入れた文法を打ち立てる時だと思ったのである。

1. 創出文法理論の枠組

筆者の提唱する創出文法理論の枠組は次の【第1図】のようなものである。

【第1図】

これを生成文法理論の枠組を図示した【第2図】と比べると、両者の違いが歴然となる。両図とも最重要部門が大きな正方形で書かれている。

【第2図】

両文法理論の相違の最たるものは、筆者の文法ではすべてのインプットをな

す「文意味部門」が最重要の地位を占めており、生成文法では「統語部門」が最重要の地位を占めている点にある。後者では「統語部門」よりも1段階も2段階もランクの低い「意味部門」と「音韻部門」は「統語部門」の解釈部門にすぎないという珍妙な考え方がされている。この枠組では、意味は捉え難いから行けるところまで形の方から攻めて行こうという意図が見え見えである。しかしそれではスペイン語の再帰構文とか反語文とかことわざの意味を捉え尽くすことはできない。この大いなる欠陥を補うのが、筆者の考えでは、筆者の文法の枠組であり、それによるとある話し手が聞き手に伝えたいと思うある想念を思いつき、それを統語論的に完全な文の形にして音声の形にして口から発する、この過程をそのままにたどろうというのである。これを山鳥、1998の表現を借りて述べると、

“言語表現の場合、われわれはまず、表現しようとするなんらかの思想を持つ。これを言語記号に置き換え、さらに音韻に置き換えて、最後に音声化して外部へ発信する。” (p.134)

となる。さらに筆者の枠組では、「統語部門」から「音韻部門」へ移る間に新たに意味が付け加わる。これは Hara, 1983に書いたように、ある人の発言を引用する文の場合、その発言を生々しい直接話法で表現するか、感情を交えない間接話法で表現するか、文体論的にいささかキザではあるが、ある人の発言の中に挿入句的に主動詞文を置くかによって、すなわち統語部門で上記3者のいずれが選ばれるかに従って、それぞれ「生々しさ」とか「客観的」とか「文学的」とかの文体論的意味が付け加わることを意味しているのである。また音韻部門を経たあとで意味が付け加わるケースというのは、原、1998で述べたセミコロン直前のイントネーションがそれであるし、スペイン語の場合ある平叙文の語順をまったく変えることなしにただイントネーションを変えることによって全体疑問文に変わるというケースもある。

このように考えてくると、意味というものが形よりも数段階が上であり、しかもずっと捉え難いということがよく分かるのである。

次に、これはさきほどちょっと触れたのであるが、筆者はスペイン語の再帰構文とか反語文とかことわざの意味とかをうまく処理するために、「文意味部門」をB、Aの両階層に分けることを提案している。B階層は表面の形式とは程遠い、いわゆる真の意味を表わす深い階層であり、A階層は表面の形式に近い意味を表わす、より浅い階層である。場合によってはC階層もありうる(Hara, 1982のpp.78-80参照)。

最近では認知言語学というアプローチが盛んになってきており、これが意味の研究を一層深化させようとしていることは大いに歓迎すべきことであると思う。しかし筆者が西村、1998という、認知言語学の手法を珍しく具体的に説明してくれている論文を読んでも、残念ながら未だに文意味部門を場合によってはC, B, Aの3階層に分ける手法には思い至っていないようである。

以下に創出文法理論の細目を紹介する。

2. 運動

文意味の中核をなすものは何と言っても文中の主動詞の意味である。これを筆者は「運動」と称しているのであるが、普通二つの漢語から成る熟語で表わされる。例えば *entristecerse* の意味であれば、「悲嘆」、*sorprenderse* の意味であれば、「驚愕」、*afirmar* や *aseverar* の意味であれば、「肯定」、*negar* の意味であれば、「否定」といったように。こういった「運動」を、高橋 正武、瓜谷良平、宮城 昇&エンリケ・コントレラス、1972、『スペイン基本語5000辞典』東京：白水社 に基づいてそれらの形成する意味場ごとにリスト・アップしたのが原、1986である。このリストを作成しての筆者の感想は、スペイン語民のとり行動の種類は意外に少ないということであった。ちなみに上記5000辞典の中に含まれていた動詞の数は1562であった。ただし筆者の考える「運動」は文の主動詞の意味だけであると理解されては困る。なぜなら筆者の考える文法は文意味部門をそのインプットとしており、しかも文意味部門を形成する文意味の中には、間投詞一つから成る文の意味や、文副詞一つから成る文の意味も含まれているからである。従って *entristecerse* の意味が形成している意味場、すなわち「悲嘆」という運動の中には、間投詞一つから成る文 *¡Ay!* の意味も含まれることになる。同様に *sorprenderse* の意味が形成する意味場「驚愕」には間投詞一つの文 *¡Caramba!* の意味が含まれる。また *afirmar* や *aseverar* の意味が形成する意味場「肯定」には文副詞一つの文 *¡Si!* の意味が含まれ、*negar* の意味が形成する意味場「否定」には文副詞の一つの文 *¡No!* が含まれるのである。これらを針山図で図示すると以下ようになる。これら針山図の中の「間投詞一つ」とか「文副詞一つ」とかの表示は、文意味部門と統語部門とが截然と分けられないことがあることの何よりの証拠である。

iAy!

間投詞一つ

【第3図】

iCaramba!

間投詞一つ

【第4図】

iSí!

文副詞一つ

【第5図】

iNo!

文副詞一つ

【第6図】

こういった間投詞一つから成る文や文副詞一つから成る文のことを Bloomfield, 1933はその p.171 において minor sentences と呼んでいる。筆者はその日本語訳を、原, 1985a の p.24 において、「小文」とすることにしたが、多くの文法理論がこの「小文」をその分析の対象から除外している。その理由は、これら小文が統語論的に非常に扱いにくいことにあると同時に、言語学者たちがいささか抽象度の高い統語論と、具体性に富む語用論とを峻別しようとするからであらうとも考えられる。

これに対して筆者は、小文を取り扱えない、あるいは取り扱わない文法は一人前の文法とは言えないという立場を取るのだから、当然のことながら、創出文法理論は小文をも取り扱うことになる。つまりわざとのように困難な道を選んだのであり、またラング的な統語論とパロール的な語用論とをあまり区別したくないということでもある。そういう観点から書いたのが原, 1985a であり、そこでは、

iOh! (喜び)

Oiga.

Señor.

Sí, señor.

Un café, por favor.

Gracias.

Hasta mañana.

Buenos días.

iSalmón en el Cabriel! (省略文)

等の非常に処理にくい小文の意味の処理法が披露されていた。なお上の Sí,

señor. のような呼び掛け語句の意味の処理を扱った論文に原, 1997がある。

3. 第1次運動修飾要素

これは意味論的に「運動」にとって必須のもの全てを指している。中でも重要なものは「格」である。これを「到着」という運動に例えて説明するならば、「だれが」「どこへ」到着するかが「到着」という運動にとって最大の関心事となる。従ってこの2要素をそれぞれ「主格」, 「目標格」と名付けるのである。第1次運動修飾要素は「格」だけに限らない。以下3項目に分けてこれら3修飾要素を説明していく。

3.1. 格

筆者は原, 1984においてスペイン語創出文法には格が21種類あると述べた。しかし本稿執筆の時点では、もう一つ, 22番目の格として「要素格」を付け加えたいと思っている。これについては§3.1.3.で述べることにする。

3.1.1. 主格を欠いた「運動」

筆者の提唱する「主格」とはいわゆる「意味上の主語」のことであるから、どんな文にも意味上の主語はあるように思えるかもしれないが、§2.で挙げた間投詞一つから成る文や文副詞一つから成る文にはもちろん意味上の主語、すなわち筆者の言う「主格」は存在しない。また llover や nevar といった、いわゆる単人称動詞にも、日本語の「雨が降る」とか「雪が降る」といった表現と違って、「主格」は設定しにくく、ただ単に「運動」を「降雨」, 「降雪」としておけばそれで済むと思う。

それでは Tengo dos hermanos. のような場合はどうするか？ 筆者は原, 1975と原, 1984において Tengo には主格はあるが、主語はないという解釈を提示した。この考えは今も変わっていない。ということは、Yo tengo dos hermanos. における Yo という主語代名詞はその名の通り主語であって、しかも統語論上の単位ということになる。しからば文意味部門では Yo はどのようにあらわされるか。それは【第7図】のように、主格に「強調」とか「対比」とかといった「準第1次運動修飾要素」が付着した場合に統語部門で Yo として現れる。この「準第1次運動修飾要素」は、§3.4.および§4.でも出て来るが、これを要するに、針山から短い針として直接出ることはないが、第1次運動修飾要素に劣らぬ文意味論的重要性を有する要素のことで、【第7図】におけるように、二重線によって表わされる。この「準第1次運動修飾要素」を提案するのは本

稿が初めてである。

【第7図】

3.1.2. 対格がゼロの場合

文意味部門で運動が他動詞でありながら対格がゼロの場合がある。これはすなわち統語部門で文の主動詞が他動詞でありながら直接目的語が現れない場合のことである。例を前述5000辞典の llevar の項より拾うならば、

Esta carretera lleva a Barcelona.

がそれである。こういう場合の筆者の解釈は、どうせ対格は統語部門に行って消えてしまうのだから、文意味論的にその対格が何を表わしているかが分かっている場合には、例えば上記の例文であれば、「ドライバーおよびその同乗者を」といった対格を補っておけばよい というものである。従って筆者の文法では上の例文における llevar を自動詞とは解釈せず、常に他動詞とする立場をとることになる。

3.1.3. まれな格

主格や対格や目標格（与格は、筆者の場合、これを解体してしまい、目標格や利害格や立場格などに細分化した）は頻繁に現れるのに対し、原、1984の末尾に置かれている19.基準格、21.反対格などは非常にまれにしか現れない。いま両者の例をやはり5000辞典の該当部分から引いてみる。

基準格… Este modelo supera al anterior en belleza de líneas.

下線部分以下の意味「線の美しさが」が運動「凌駕」に対して「基準格」を形成していると筆者は判断したしだいである。

反対格… El pueblo se sublevó contra el gobernador.

下線部分以下の意味「総督に対して」が運動「反乱」にとって「反対格」を形成していると筆者は判断した。さて§3.1.で予言したように、原、1984で筆者は21種類の格をスペイン文の運動に対して設定したが、その後もう一つ22番目の格を「要素格」として設定したくなった。その例文は、

El mes de julio consta de treinta y un días.

というものであり、筆者は下線部分以下の意味「31日から」が運動「成立」に

とって「要素格」を形成していると判断した。

かくてスペイン語創出文法における格の数は22となったのである。

3.2. 時制表示

筆者は時制表示が第1次運動修飾要素なのか、それとも文意味修飾要素なのかについて長い間迷いに迷ってきたが、ついに原、1987において、それは第1次運動修飾要素であるとの結論を出した。迷いに迷ってきた理由には二つあり、一つは変形生成文法理論も比較的うまく活用している IP 方式について慎重に考えていたからであり、もう一つは動詞の屈折語尾で表示される時制や法が果たして文意味全体を修飾できるのだろうか非常に疑問に思っていたからである。法の話が出たついでに、筆者の文法で法がどういう役割を果たすかを述べておく。筆者は Hara, 1981においてスペイン語には三つの法、すなわち直説法、接続法、命令法があることを述べた。このうち直説法は、筆者の文法が文意味をインプットしている以上、とくに直説的であるという表示をする必要はないと考える。筆者の場合直説法は, tomo, tomas, toma; …を接続法の tome, tomes, tome; …から区別するための形態論的単位になってしまうのである。他方接続法はその名の通り、接続詞に導かれた従属節の中の従動詞に現れる、統語論的単位であり、意味論的には主動詞の意味しだいで現れたり、現れなかったりする以上、やはり筆者の文法では重きをなさない。命令法はこのあとの §3.3. で述べるように、第1次運動修飾要素である。

3.3. その他の第1次運動修飾要素

以上の他にも「運動」として文意味論的に最重要と考えられる第1次運動修飾要素は多数あり、以下にそれらを列記する。

他動的… §2. で述べたように、「運動」は普通二つの漢語から成る熟語で表される。ところがこれら熟語はその意味が自動詞的であることが多く、これをそのまま他動詞に富むスペイン語に適用するわけにはいかない。そこでどうしても「他動的」という第1次運動修飾要素が必要となってくる。例えば「汚染」という運動は統語部門では自動詞的な意味を持つ *mancharse* という形で現れてくる。そこで「汚す」という他動詞的な意味を出すためには「汚染」に「他動的」という修飾要素を付け、重複するようではあるが、「対格」をも設けねばならない。この手法が、文意味部門に B, A 両階層を設ける手法とあいまって、再帰動詞の分析に絶大なる効力を発揮するのである。

受動…能動文から受動文を生成する方法を意識的に避けてみた。

否定…よく準第1次運動修飾要素として現れることがある。

命令…これについてはすでに § 3.2. で触れた。ただし *decir* や *mandar* や *ordenar* の意味が「運動」として針山の中に入る場合を除く。また *No te preocupes.* のような場合には、「命令」が第1次運動修飾要素、「否定」がそれに連なる準第1次運動修飾要素とそれぞれなる。なお動詞 *prohibir* の意味が「運動」として針山の中に入る場合はもちろん別扱いとなる。

間投詞一つ、文副詞一つ…これらについてはすでに § 2. で述べた。

義務… *deber, tener que*

可能… *poder*. ただし *poder* の意味は「蓋然性」や「許可」になることもある。

習慣… *soler*

直後… *acabar de*

究極… *acabar por*

偶然… *acertar a*

敬意… *dignarse, hacer el favor de, servirse, tener a bien, tener el gusto de, tener la amabilidad de, tener la bondad de*

開始… *echar a*

進行中… *estar* (+現在分詞)

完了… *haber* (+過去分詞)

予定… *haber de*

直前… *ir a*. これは「意志」を表わすこともある。

充分… *no hay más que*

不可避… *no poder menos de*

以上 § 3. で述べられた第1次運動修飾要素（これは針山図では針山から出る短い針の先端に表示される）は、在来の常識からすると、レベルの混同を犯しているように映るらしい。現に筆者は著名な二人の言語学者からこの点を指摘された。しかし筆者はレベルを厳密に区別することによってがんじがらめになることを嫌う上に、筆者の文法は文意味をインプットする以上、意味を主、形を従とする文法であり、意味論でレベルを厳密にすることは不可能に近いし、また無意味でもあると考える者である。

3.4. 準第1次運動修飾要素

これについてはすでに §3.1.1. と §3.3. で披露済みであるが、簡単にまとめておくと、「運動 (= 針山)」に密着してはいないが、文意味論的に必須の要素のことであり、これを筆者は2本針で表わすことにした。次の2文の針山図を比較すると、この修飾要素の性質がはっきりすると思う。

【第8図】

【第9図】

4. 第2次運動修飾要素

これは針山図では長い針で表わされ、文意味論的に必須とは言えないが、二次的に「運動」を修飾する要素のことである。例えば、

El padre de Carmen llega a su oficina a las nueve.

という文で、運動は「到着」、a su oficina は第1次運動修飾要素であり、かつ「目標格」であるが、a las nueve は第2次運動修飾要素である。時刻の表示は「到着」という運動にとって必須とは言えないからである。

この第2次運動修飾要素については比較的問題が少ないように筆者は思う。そこで少し脱線気味になるが、副詞句強調構文において強調さるべき副詞句が第2次運動修飾要素である場合それに「強調」という準第1次運動修飾要素が付くケースを取り上げてみたい。上記の例文を a las nueve を強調した副詞句強調構文に直すと、

A las nueve es cuando llega el padre de Carmen a su oficina.

となる。その日本語訳には二通りあって、

9時にこそカルメンの父親は彼のオフィスに着く。

カルメンの父親が彼のオフィスに着くのは9時である。

がそれらである。そもそも主語は名詞(句)であるのが普通なのに、この場合は副詞句や副詞節であるのは実に興味深いことである。この副詞句強調構文の針山図を書いてみる。

[B 階層]

【第 10 図】

O₁ :

【第 10' 図】

【第 10 図】で分かるように、[B 階層] の文意味が [A 階層] において二つに分かれているところに、副詞句強調構文についての筆者の解釈の大きな特徴がある。なおこの副詞句強調構文については、すでに原、1975の p.96, 原、1984の pp.52-53, 原、1995の pp.46-47 でも扱っている。

5. 文意味修飾要素

これについてはすでに原, 1987と原, 1996で扱っている。今復習の意味で文副詞（句・節）を形成しうる接続詞, 前置詞, 副詞句を列挙すると,

接続詞… como（理由・様態）, porque, aunque, si

前置詞または接続詞… según

副詞句… al parecer, en resumidas cuentas

となる。なおこのうち como の用例は,

Como era de esperar, José Luis fichó por el Real Madrid.

のような場合である。これに対して主動詞の意味にのみかかる副詞節を導く接続詞には,

cuando, tan ~ como, donde, sin que, como

がある。ここでは como が2度も現れているが、この como は上で出て来たものとは性質を異にしている。例を挙げるなら,

Hazlo como te digo.

のような場合であり、このようなケースでは como 以下の意味は Haz の意味のみにかかっていると考えたい。

また文意味部門だけに現れて、統語部門では消えてしまう文意味修飾要素もあることは、原, 1996の p.73 で例を挙げて述べた。その例とは,

¡Cuántos años cree usted que tengo!

であり、この文に筆者は「いらだち」のニュアンスを感じた。なるほどこの「いらだち」のニュアンスはいったん統語部門では消えるのであるが、実際の発音（＝音韻部門）の口調に現れるし、また表記の上でも感嘆符で表わされている。

6. 文意味挿入要素

おそらく筆者が創出文法理論を体系化する際にもっともない智慧を絞ったのが、この文中どこにでも挿入される呼び掛け語句の意味分析ではなかったであろうか。これももとはと言えば、筆者が実際に口語体で現れるいかなる文をも分析の対象とすると決めたからに他ならない。さんざん苦しんだ挙句、針山図では「根っ子」と呼ばれる要素を設けることにした。その詳細については原, 1997で述べた。

7. メタ言語

文意味はすべて針山図で表わし尽くせるものでは決していない。図示できない部分についてはメタ言語を大いに活用すべきである。とくに文意味部門における B 階層において、あるいは統語部門において定冠詞つきあるいは無冠詞として現れる名詞の意味論的説明において活用すべきである。この件については原, 1985b において考察済みである。

8. 未解決の問題

スケールは小さいものの、筆者にとって未解決の問題がないわけではない。

8.1. 接続詞 como (…ように) に導かれた節の意味が修飾するもの

これは §5. で取り上げられた, como に導かれた節の意味が文意味修飾要素か, はたまた第 2 次運動修飾要素かという問題である。目下のところ筆者は漠然とではあるが, como 節が主節に先行し, 両節の間にコンマがおかれていると前者, como 節が主動詞句に後続していて両者の間にコンマがない場合は後者と考えている。しかしこの件についてはより深い考察が必要であることは論をまたない。

8.2. 既然形

原, 1995 で取り上げた既然形とは, 完了形 *He escrito la carta.* に対する, *Tengo escrita la carta.* という形のことである。この形について, 筆者は愚かにも, 運動が「所有」, 主格が「私は」, 対格が「その手紙を」, 叙述格が「書かれて」と安易に解釈していた。しかしよくよく考えてみると, この場合の叙述格にとっての主格は「私は」ではなくて, 「その手紙は」でなければならない。そこで筆者は三つの代案を考えてみた。その 1 は「所有」の対格を受身文の O_1 の意味とするものであるが, これは「所有」の対格が O_1 の意味となる点が不自然である。

その 2 は「所有」の対格「その手紙を」に何らかの形で叙述格の「書かれて」を直接かけるものであるが, このような手法には類例がなく, また針山図でもどう表示してよいのか分からない。もちろんメタ言語による表示も不可である。

となると, この際いっそのこと叙述格を抹消してしまうのが上策なのかもしれない。これがその 3 の方策である。つまり「所有」という運動に対し主格と

対格のみを設定し、対格から針を出して O_1 を付加する。そして O_1 の意味を「その手紙は書かれる」と受身にしておくのである。結局「その手紙」が重複して表示され、あたかも関係節のような意味を帯びることになるが、筆者は目下のところ、消去法的にこの解釈がもっとも無難であると考えている。

9. 結びに代えて

以上の体系化によって、筆者としてはスペイン語のいかなる文でも筆者流に分析できるという目算が立ったと考えたい。

参考書目

Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. London: Allen & Unwin.

原 誠. 1975. 「スペイン語に主語はあるか？」『イスパニカ』19. 85–97.

Hara, Makoto. 1981. La posición de los tres modos en la gramática productiva española. *Linguística Hispánica* 4. 85–95.

Hara, Makoto. 1982. Algunos problemas del pronombre reflexivo “se” en la gramática productiva española. *Linguística Hispánica* 5. 73–83.

Hara, Makoto. 1983. Algunos problemas del orden de colocación de los elementos oracionales en la gramática productiva española. *Linguística Hispánica* 6. 91–108.

原 誠. 1984. 「スペイン語創出文法理論の文意味部門に格はいくつあるか？」『イスパニカ』28. 49–65.

原 誠. 1985a. 「スペイン語創出文法理論による、いわゆる‘小文’の文法的処理法について」『アジア・アフリカ文法研究』14. 41–56.

原 誠. 1985b. 「メタ言語讀」『イスパニカ』29. 1–26.

原 誠. 1986. 「創出的意味部門の中核としての“運動”の形成する場」『アジア・アフリカ文法研究』15. 181–210.

原 誠. 1987. 「スペイン語創出文法理論における‘第1次および第2次運動修飾要素’と‘文意味修飾要素’とに関する考察」『アジア・アフリカ文法研究』16. 249–262.

原 誠. 1995. 「性数一致形容詞の中性名詞化構文について」『イスパニカ』39. 42–57.

原 誠. 1996. 「創出文法理論によるいわゆる文副詞（句・節）の処理法」『イスパニカ』40. 63–79.

原 誠. 1997. 「スペイン語の呼び掛け語句の、創出文法理論による処理法」『拓殖大学論集』227. 23–40.

原 誠. 1998. 「スペイン語創出文法によるセミコロンの処理法」『イスパニカ』42. 36–48.

西村 義樹. 1998. 「認知文法と生成文法」『言語』27-11. 48-55.

山鳥 重. 1998. 『ヒトはなぜことばを使えるか 脳と心のふしぎ』東京：講談社.

【付記】 本稿は、1998年10月31日（土）に拓殖大学八王子キャンパスで開催された第44回日本イスパニヤ学会大会において同じタイトルで口頭発表したものをのちに多少の改変を施して文章化したものである。

Sistematización de la gramática productiva española

HARA Makoto

La gramática productiva es la que parte del componente semántico oracional como entrada (aducto) y alcanza el fonológico como salida pasando por el sintáctico. Su componente semántico oracional consta de los elementos siguientes: —

(1) Movimientos

Son los que constituyen el núcleo del componente semántico oracional. Equivalen aproximadamente al significado del verbo principal del componente sintáctico. Pero los constituyen también el significado de la interjección tal como '¡Ay!' y el del adverbio oracional tal como 'sí' y 'no'.

(2) Modificador primario de movimiento

Es todo lo semánticamente indispensable para el movimiento.

Consta de tres subdivisiones.

(a) Casos

Equivalen aproximadamente al significado de los complementos directo, indirecto y circunstancial. Hay 22 casos en español.

(b) Expresión del tiempo

presente, pasado desinente, pasado permanente, futuro, etc.

(c) Lo demás

- (i) Causativo
- (ii) Pasivo
- (iii) Negativo
- (iv) Imperativo
- (v) Uni-interjeccional
- (vi) Uni-adverbial oracional
- (vii) Obligación (deber, tener que)
- (viii) Posibilidad, probabilidad, permiso (poder)
- (ix) Costumbre (soler)
- (x) Inmediatamente después (acabar de)
- (xi) Por fin (acabar por)
- (xii) Casualidad (acertar a)

- (xiii) Respeto (dignarse, hacer el favor de, servirse, tener a bien, tener el gusto de, tener la amabilidad de, tener la bondad de)
- (xiv) Comienzo (echar a)
- (xv) Progresivo (estar + gerundio)
- (xvi) Perfectivo (haber + participio pasado)
- (xvii) Programa (haber de)
- (xviii) Inmediatamente antes · voluntad (ir a)
- (xix) Suficiencia (no hay más que)
- (xx) Inevitabilidad (no poder menos de)

(d) Modificador cuasi-primario de movimiento

Aunque no se adhiere directamente al movimiento, es el elemento indispensable desde el punto de vista semántico oracional.

(3) Modificador secundario de movimiento

Aunque no es indispensable semántico–oracionalmente, es el elemento que modifica al movimiento secundariamente.

(4) Modificador del significado oracional

Recuérdense las cláusulas adverbiales introducidas por conjunciones como ‘como’, ‘porque’, ‘aunque’, ‘si’, etc.

(5) Elemento insertado dentro del significado oracional

Es lo que se llama vocativo.

Con estas cinco unidades, el autor se cree capaz de analizar cualquier tipo del significado oracional.